

大橋めぐみ作「春に輝いて」

< 前編 >

- 秋本梨香 あっちゃん、お昼行こうよ。真理子も。
- 川上敦子 行く行く。おなかすいたよ～。
- 浅田真理子 何食べる？
- 梨香 「オリーブ」の Pastaランチ！
- 敦子 あたしも今そう言おうと思ってたところ！
- 真理子 じゃ決まり。早く行って並ぼう。
(「行こ行こ」などと言いながらF0)
- 敦子ナレーション わたしは川上敦子。ごく普通に大学を卒業し、ごく普通に就職をして丸3年がたとうとしている。わたしの会社は、某大手コンピュータメーカーの子会社で、ソフトの開発がメインの仕事だ。といっても、わたし自身は「業務課」という管理部門に配属され、各部署から出される書類のチェックや、営業成績のパソコン入力などを行っている。
- 梨香と真理子は同期の友人で、部署は違うけれど、一緒にお昼を食べたり、遊びに行ったりしている仲だ。
- (効果音) 店内のざわめき。食器の音など。
- 敦子 ええー！ 梨香、会社辞めるの～？
- 梨香 シー！ まだ3か月も先の話よ。来月まで内緒にしててね。
- 真理子 辞めてどうするの？
- 梨香 うん、そろそろフリーでやってみようかと思って。
- 敦子ナレーション 梨香は開発部門で旅行会社のオンラインシステムを作っていて、
- 梨香(エコー) こういふ仕事って、フリーでやったほうが断然もうかるんだって。
- 敦子ナレーション ...と口癖のように言っていたのだが、こんなに早く実行に移すとは思ってもしなかった。先輩方だって驚くに違いない。
- 敦子 カッコいいな、梨香は。あたしもそんなこと言ってみたいけど、毎日パソコン入力と書類のチェックばかりで、「こんなのだれだってできるよ」って感じ。ぜんぜんやりがいなんてないし。あ～あ、異動になんないかな。
- 梨香 でも残業のあらしだよ。テストがうまくいかなかったり、納期が迫ってたりすると、徹夜の人だっているし。アフター5(ファイブ)なんてないよ。あっちゃん、それでもいいの？
- 敦子 うーん…。
- 敦子ナレーション カッコいい...と思ったのは本当だ。身に着けた技術を武器に、自分で道を選べる梨香はカッコよかったし、少しうらやましかった。

真理子 でも、フリーだと仕事の保証はないでしょ。勇気あるよねえ。再就職なんて厳しいじゃない。就職情報誌とか見てもさ、そろそろ年齢制限やばそうだし。あたしは永久就職って決めてるけど。

梨香 はいはい。先立つものがある人はそれでいいのよ。

真理子 何？ お金？

梨香 彼氏よ。

3人 (笑い)

敦子ナレーション その日の午後は、何だか仕事が身に入らなかった。結婚退職を夢見る真理子と、実力勝負の道へと見込もうとする梨香。そして半ば惰性で生きてるわたし。

敦子(モノローグ) わたしはいつまでここにいたんだろう。ここで何をやるんだろう。

森清子 川上さん、システム2部からの勤務報告書が届いてるからね。

敦子 あ、はい…。

森 どうしたの？ 元気がないんじゃない？

敦子 森さん。森さんは会社辞めようと思ったことありますか？

森 (笑い)辞めるわよ。結婚して子供ができたらね。でも、貯金もしなきゃいけないし、まだしばらくは無理そうだけどね。

敦子 ふーん…。結局、みんなそうなのかなあ。

森 どうしたの、川上さん？

敦子ナレーション 今までも、自分のやりたいこととか何となく考えたことはあったが、梨香のフリー宣言で、不意に自分の現実を考えさせられ、わたしは少し憂うつになった。そんなある日のこと…。

敦子 おはよう。

真理子 おはよう。ねえ、あっちゃん、ゆうべのこと聞いた？

敦子 聞くわけないよ。今来たばっかなのに。何、ゆうべのことって？

真理子 梨香のやってるプロジェクトで、何かトラぶったらしくってさ。詳しく知らないけど、梨香も昨日から一睡もしてないらしいよ。

敦子 本当？ あ、梨香。

梨香 おはよう。

敦子 おはよう。大丈夫？

梨香 (眠そうに)何とかね。今日中には復旧できると思う。今、みんなで原因を探しているんだけど、これが結構面倒で、昨日は人の出入りも多かったし、色んな人があの端末を使ってるから、いつごろデータが変更されたのか、いちいち当たるのが大変なのよ。

敦子 昨日は、内の業務課でも使ったよ。わたしも使ったし、森さんも。

梨香 多分関係ないと思うけど、一応来てみる？ 森さんも来てるよ。

敦子 うん。

敦子ナレーション コンピュータ室には、わたしたちのほかにも関係ありそうな人たちが集まり始めていて、プロジェクトのメンバーがパソコンの画面を前に、話し合っていた。

社員A ここまでは大丈夫みたいだぞ。

社員B こっちも問題なし...か。おい、その直後のバックアップは？

社員C これです...あれ？ ここおかしくないですか？

社員B あー！ ひっでえなあ！ 何でだよ。

社員A ちょっと、それ追っかけようぜ。

梨香 じゃ、こっちで開くからね。

敦子ナレーション 部外者のわたしにはさっぱりわからない会話をしながら、てきぱきと作業を進める梨香を見ていると、同期のはずの梨香が何だかずっと上のほうに行ってしまったように思えて、少し焦った。

梨香 あ、これかなあ。昨日の16時43分になってるけど。その前の15時22分でこっちは正常だから。

社員A ほんとだ。だれが使ってたんだ？

社員C 僕です。でも、データを流したあとキャンセルしておいたはずなんですけど...

社員B 流してる間に、だれかがご丁寧にセーブしてくれちゃったってことか。

社員C でも端末を離れたのは、コーヒーを入れに行った時くらいですよ。

社員A 終わってから行けよなあ。でも、わざわざこれをセーブするやつなんて、いるとは思えないけどな。

敦子(モノローグ) 昨日の5時前か。

敦子ナレーション その時間に何かのミスでデータが変わってしまったらしいということだけは、何となく分かった。その時間は、わたしも先月の営業報告書を入力するため、ここに来ていた。

敦子(モノローグ) あの時、一番左のパソコンが空いていて、画面を切り替えようとしたのに、なぜか替わらなかったから、隣で森さんが使っていたのを次に使わせてもらったんだっけ。あれって関係あるのかな...！ まさか、わたしが使おうとしたパソコンの画面に出てたのが、あのデータだったとか...もしそうだったら...。どうしよう、わたし、とんでもないことしちゃったのかも...。ううん、あの時は何も起きなかったはずよ...でも、自信がないよ。もしあの中のだれかがそれに気づいたら...何て言われるだろう...

敦子ナレーション わたしは緊張で体が熱くなっていくのを感じた。自分のせいかもしれないという不安と、それがみんなに分かってしまったらという心配とで、胸が押しつぶされそうだった。

社員A とにかく原因は分かったんだから、何とか夕方までに元通りにしようぜ。

社員B ああ。しかしこの時期に、いて一よなあ。あ、皆さん。お騒がせしました。あとは

大丈夫ですから。

他の社員たち (口々に)「ご苦労さん」「頑張ってね」「かわいそう」など。F0

敦子ナレーション 自分に関係ないことが分かって、みんなホッとした表情で引き上げていったが、わたしはなかなかその場から動けなかった。

真理子 (遠くで)あっちゃーん。行かないの？

敦子 あ、うん、行くよ。

敦子ナレーション とりあえず席には戻ったものの、みんなの視線がわたしを疑っているような錯覚に襲われて、わたしは仕事どころではなかった。

森 川上さん...川上さん、聞こえた？

敦子 え...あ！

森 昨日打ち込んだ営業報告ね、営業部に届けてきてくれる？

敦子 はい。

森 先月も斎藤君がトップね。これで何か月連続かしら。ほんと、天職よね。

敦子ナレーション 斎藤弘さんは、わたしの1年先輩、森さんと同期の営業部員だ。とてもいい人なのだが、今のわたしは他人が褒められると余計自分が情けなく感じられてつらかった。営業部の帰り、わたしは梨香を給湯室に呼び出し、思い切って昨日のことを打ち明けた。

(効果音) お茶を注ぐ音。

梨香 そっか。それは思いつかなかったわ。

敦子 ねえ、やっぱりわたしのせいかなあ。

梨香 うーん。確かにあちゃんが間違えた可能性もあるけど、もう気にすることないよ。多かれ少なかれ、そういうミスってだれでもやったことあるもんなのよ。それに、あれはテストのためのデータで、お客さんにも迷惑はかからないし。

敦子 でも、今日一日仕事が遅れちゃうんでしょう。もしプロジェクトの人たちにバレたら、と思うと...もう会社に来られなくなっちゃうよ。

梨香 大丈夫よ。だれがやったか追及する人なんていないし、だれにも言わないから。

敦子 うん、...ありがと。

(効果音) 近くで足音。

敦子(モノローグ) だれかに聞かれた！

敦子ナレーション わたしは慌てて廊下に出てみたが、足音の主は分からなかった。

梨香 どうしたの？

敦子 だれかがいたの。どうしよう、聞かれちゃったかもしれない。

梨香 そんなの言いふらす人なんていないって。

敦子 そんなの、分かんないよ...。

敦子(モノローグ) だれかがわたしの失敗を知っている。会社のだれかが...

敦子ナレーション 同じフロアの人の顔を、一人一人思い浮かべながら、わたしは自分の席に戻ることにささえも怖くなっていた。梨香は笑顔で励ましてくれるけど、それは自分の仕事に自信があるからだ。わたしは自分の仕事に、そして自分自身に嫌気がさして、すっかり自信をなくしてしまっていた。

敦子(モノローグ) わたしなんてダメなんだ。何もできないし、真理子みたいにステキな夢もないし、梨香みたいに、やりたい仕事を自分で開発していく実力もない。もう何もしたくない…。

敦子ナレーション その日、わたしは会社を早退した。頭の中が、ただけだるかった。

< 後編 >

敦子ナレーション わたしは川上敦子。同期の友人の梨香がフリー宣言をして以来、自分の仕事や将来のことに疑問を感じていた矢先に、大きな失敗をしてしまい、すっかり自信をなくしてしまっていた。そして、悪いことは続くもので、その失敗をだれかに知られてしまったのだ。わたしは、もう何も考えたくない気持ちで、会社を早退し、ぼんやりと電車に乗っていた。

斎藤弘 川上さん。…川上さん。

敦子 はい？ …あ、斎藤さん。

斎藤 具合悪そうだけど、早退？

敦子(モノローグ) よりによって、こんなときに会社の人と会っちゃうなんて…。

斎藤 仕事疲れかな。

敦子 いえ…。そんなに忙しくないですから。斎藤さんは大変そうですね。

斎藤 おれが？

敦子 いつも報告書を見て驚いています。

斎藤 ハハハ。自分が一番びっくりしてるよ。

敦子 そうですか？ だって斎藤さんって、話し上手だし、明るいいし、服もキマってるし、もう営業にぴったりって思いますけど。森さんも、斎藤さんは天職だって言っていました。

斎藤 ちょっと褒めすぎだな。でも、最初からこうだったわけじゃないんだ。新人のころなんてひどいもんだったよ。

敦子 ひどいって？

斎藤 とにかく人と話すのが苦手だね。いつも話し掛けられないように下を向いて歩いてた。暗い顔で、サエない格好して、何を聞かれても緊張しちゃってね。なのに営業部に配属されちゃっただろ。それこそ夜眠れないくらい悩んだよ。

敦子 本当ですか？ 信じられない…。

斎藤 当然、営業に出ても成績は上がらなかった。

敦子 辞めようとは思わなかったんですか？

斎藤 毎日思ってたよ。かばんの中に辞表入れて歩いてた。

敦子 でも、それじゃどうして斎藤さんは、その…。

斎藤 “やる気を出したのか”だろ？おれはね、今でも自身をなくしそうになるときは、これを見るんだ。

敦子ナレーション 斎藤さんは、ポケットから名刺くらいの大きさのカードを取り出して、わたしに見せてくれた。それには、かわいい、子供向けのイラストと短い言葉が書いてあった。

敦子 「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」(ローマ書 8:32)…何ですか、これ？

斎藤 聖書の言葉なんだけど、昔通ってた教会の日曜学校でもらったんだ。何回目かの辞表を書こうとして便せんを探していたら、出てきた。おれの考えていることが全部バレているみたいで、ちょっと驚いたけど、「神が私たちの味方であるなら」という一言がとても力強くてね。不思議なことに次の日は客先に行っても逃げ腰にならなかったんだ。そして初契約も取れた。先輩たちもすごく喜んでくれてね。初めて仕事が楽しいと思ったよ。

敦子 仕事…。斎藤さん、わたし…本当は会社にいたくなくて、それでこーやって逃げてきたんです。ううん、会社だけじゃない。何をしても自分はダメなんじゃないかって思っちゃって…。

斎藤 …そうか。驚いたな、そうだったのか…。

敦子 …はい。

斎藤 あのね、川上さん。おれはそのあともう一度教会に行くようになったんだけど、もしも君が本当にどうしたらいいのかわからないなら、うちの牧師先生に話してみたらどうかな。日曜日、予定ある？

敦子 教会…ですか？

敦子ナレーション 思いがけない展開にわたしは戸惑ったが、斎藤さんをここまで変えたあの小さなカードの言葉に、わたしの心は動かされていた。

敦子(モノローグ) 聖書でも何でもいい。わたしを助けてくれるものがあるなら。

敦子ナレーション そして次の日曜日、わたしは生まれて初めて教会を訪れたのだった。

牧師 よくおいでくださいました。斎藤君から聞いてお待ちしていましたよ。

敦子ナレーション 牧師先生は、わたしの話を、時々励ますように相づちを打ちながら、聞いてくれた。

敦子 先生、わたしは…会社に行くだけで不安になるんです。不安になって逃げ出たくなるのに、どこへ行けばいいのかも分からない。何に対しても自信がなくて、何をすればいいのかも分からないんです。

牧師 川上さん。あなたは斎藤君が昔どんな青年だったか、そしてどのように変わったのかをお聞きになって、驚かれたでしょう。あの言葉には、実はこういう続き

があるんです。「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜みせずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。」

敦子
牧師

どういう意味ですか？

人間は、一人一人「罪」というものを持って生まれてきます。残念ながら、罪を持たない人間は一人もいません。わたしも、斎藤君も、そしてあなたもです。ですからわたしたちは皆、その罪に対して罰を受けなければいけなかった。しかし神様は、わたしたちの代わりに、何と、ご自分のたった一人のみ子イエスキリストにその罰をお与えになり、文字通り、「死に渡された」のです。

敦子
牧師

なぜ神様はそんなことをなさるんですか？

あなたが必要だったからですよ。

敦子
牧師

わたしが...ですか？

そうです。神様は、あなたや、斎藤君や、私たちみんなを愛していらっしやいます。神様にとって、あなたはかけがいのない存在なのです。ご自分のみ子を死に渡されるほどの価値があるのです。

敦子

でもキリストって、もう 2000 年も前に、十字架刑で死んだんでしょう？ 偉大なキリスト教の教祖だってことは知ってたけど...。その人が、今わたしを愛してるなんて、なんか、信じられません。

牧師

川上さん。そう考えるのはよく分かります。これは信仰の問題だからね。でも、信仰の世界というのは、時間や空間を超えるんです。さっきわたし、人間は罪びとだと言ったでしょう？ 気を悪くされたかもしれないけど、でも聖書の言う罪は、自己中心、エゴイズムということで、憎しみ、ねたみ、愛のなさ、むさぼりなどだとしたら、あなたも自分を正直に見つめたら、“そうだなあ”と思いませんか？

敦子

ええ、それは、確かに...

牧師

その罪はね、神様につくられた人間が、その神を捨てて、自分勝手に生き始めた時に生まれたんですよ。そこから、孤独な、目的を見失った、むなしい人生が始まったんです。川上さん、あなたが今感じておられる喪失感も、本当の原因はそこにあるんですよ。

敦子

そう...なんですか？ なら、どうしたらいいんでしょうか。わたし、もう何もかも自信なくしちゃって...

牧師

川上さん。どうぞ、ご自分を否定しないでください。み子さえも下さった神様が、すべてを下さるとおっしゃっているのです。あなたがまだ気づいていない、ありとあらゆる可能性や能力、女性としての魅力も、...すべてです。あなたは神様から頂いたたくさんの良いものを持っているんですよ。

敦子(モノローグ) ご自分の子供まで下さった方が、すべてを下さる…。

牧師 川上さん。あなたは2000年前に死んだと言ったけど、この方は神のみ子ですから、3日目によみがえって、今も生きておられるんです。だから、信じる人の心の中に、いつでも、どこでも一緒にいてくださる。斎藤君が今あるのも、このイエス様によって生まれ変わったからなんです。

敦子 はい…先生、わたしも変われるでしょうか？

牧師 もちろんです。神様が味方してくださるのですからね。

敦子ナレーション 不意に涙が胸の奥から突き上げてきて、いつまでも止まらなかった。

(間)翌日、わたしは本当に久しぶりに、晴れやかな気持ちで出社した。

(音楽) BGM、軽やかに。

真理子 おはよう、あっちゃん。具合どう？

敦子 おはよ、真理子。もう全然平気よ。

真理子 よかった。なんかずっと元気なかったから。お昼だって余り食欲なかったみたいだし、心配しちゃった。

梨香 おはよう。

敦子 梨香。ごめんね、2人とも。心配かけて。

梨香 ま、復活したならいいか。

敦子 ありがとう。復活…よみがえりのイエス様か。

真理子 え、何？

敦子 ううん、何でもない。

梨香 さーて、仕事してこよ。昨日も休日出勤だったのよ。全くどこかの上司がむちゃくちゃなスケジュール立てるもんだからさ。あー、遊びに行きたーい。

真理子 あたしがその分彼氏と遊びに行っておいてあげるって。梨香は仕事頑張ってるね。

梨香 はいはい、よろしく頼むわね。

敦子・真理子 (笑い)

敦子ナレーション 不思議なことに、梨香や真理子と話していても、ついこの間までの焦りやうらやむ気持ちは、どこかに消えていた。わたしだって、これから何でもできる。わたしには、心強い味方がついているのだから。わたしのことをだれよりも愛していてくださる、イエス・キリストという味方が。退屈で無意味に思えた今の仕事だって、今日からは、わたしが輝くためのチャンスかもしれないのだ。わたしは、オフィスの窓から思いっきり息を吸い込んだ。それは、命一杯の春の空気だった。

(完)